スポーツニッポン　2011年（平成23年）7月1日（金曜日）　（第3種郵便物認可）

高田の特別な夏が始まった

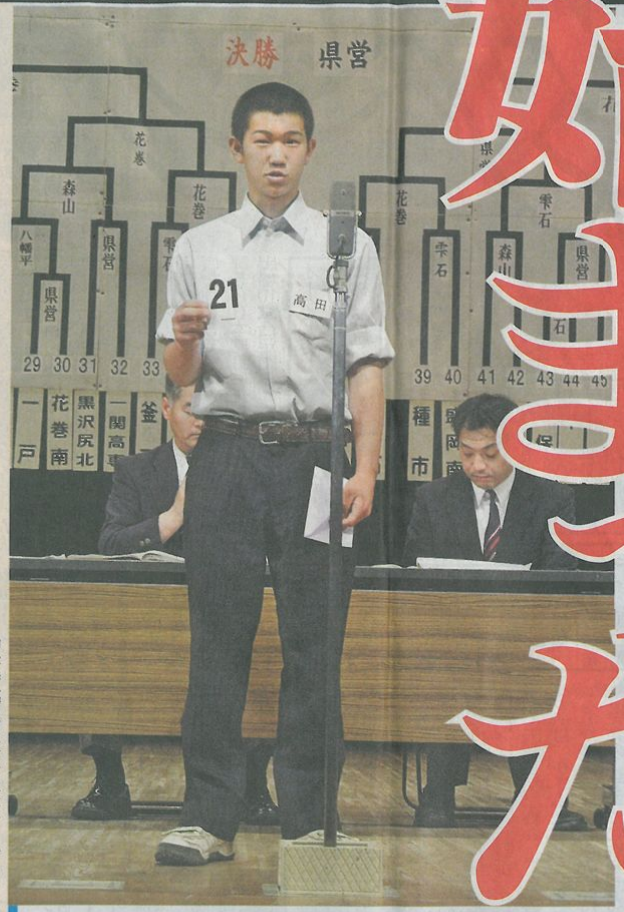
高校 本紙「復興へのプレーボール」で毎月連載

甲子園への道 2011 30日

第93回全国高校野球選手権大会（8月6日から15日間、甲子園）岩手大会の抽選が行われ、本紙が連載する「復興へのプレーボール」の高田高校は16日の2回戦で強豪・盛岡工と対戦することが決まった。3月の東日本大震災で壊滅的な被害を受けながら、復興に向けて奮闘する同校ナイン。今大会は新たに「陸前高田市」の文字を右袖に入れた新ユニホームで特別な夏に臨む。また、秋田、山形、滋賀の組み合わせも決まり、南・北北海道大会は30試合が行われた。

岩手大会組み合わせ決定

初戦は強豪・盛岡工と



「どことやっても負ける気はない」 大和田主将

いきなりの強敵との対戦にも強気だった。大和田主将は、県内屈指の左腕・藤村を擁する盛岡工との対戦が決まっても動じなかった。

「相手はどこでもよかったです。どことやっても負ける気はない。支援してくれた人たちに自分たちが元気なところを見せたいです」

沿岸部に位置する陸前高田市は県内最多の1524人の死者を出した。野球部は震災から1カ月以上経過した4月23日に活動を再開。しかし、震災前まで練習に使用していたグラウンドには仮設住宅が建設された。隣接する室内練習場は健在だが、電気が通ったのは5月上旬だった。

絶対的に不足する練習量。

初戦で盛岡工との対戦が決まった高田・大和田主将

少しでも補うためには地元を離れるしかなかった。5月の盛岡遠征を皮切りに、宮城県など東北各地に遠征した。6月11、12日には群馬県にまで足を延ばすなど、物心ともに相手校の協力を得ながら実戦を積んできた。体重が6キロ以上減った選手もいる。一時的に精神的に不安定となった選手もいた。それでも野球を続けてきた。

地元の思いを背負って戦うために、ユニホームのデザインを一部変更した。ユニホームを津波で流された部員もいたため、佐々木明志（あきし）監督の母校・早大のOB有志から届けられた義援金で新調した。右袖に新たに入れた「陸前高田市」の文字。「おこがましいですけど、陸前高田市民の方々の力になれれば」と佐々木監督は言う。

練習環境に恵まれなかったため、これまではチームをA、Bの2班に分けて練習せざるを得なかった。しかしきょう1日からは岩手県一関市花泉で震災後初めて部員59人全員で2泊3日の合宿を敢行する。「これでチームに一体感が出てくれば」と指揮官。困難を乗り越え、大会出場にこぎつけた。部員全員で特別な夏をつかみにいく。

（白鳥　健太郎）

右袖に「陸前高田市」刻み、誇りとともに

宮古はVS昨夏覇者・一関学院

上沢主将「注目が集まることは力になる」

初戦の相手が昨夏覇者のシード校、一関学院に決まっても、宮古・上沢主将は「県営球場で、初戦が一関学院。注目が集まることは力になる」と笑顔を見せた。

今回の震災で失ったものは大きかった。上沢主将の家族は全員無事だったが、中学時代の同級生は津波に奪われた。親を亡くした部員もいた。グラウンドも野球道具もユニホームも一瞬にして消えた。「あるのが当たり前だったものがなくなったけど、震災前には気づかなかったことが分かった。得たものもたくさんある」。支援してくれる人の温かさ。地域の人に元気を与えたい。今までにない感情も芽生えた。

この日の朝、自宅で仏壇を拝んでから会場入りした。「3年間の全てを出して、支えてくれた人に感謝を伝えたい」。被災した球児ではなく、3年間野球を続けた選手として。最後の夏が始まる。（金子　しのぶ）

10年後の岩手見据えて戦

〈岩手…〉〈大会…〉目の2回戦で葛巻と…する。震災直後は部員で物資搬送などのボ…ンティア活動を行っ…